

双子

## はじまり

---

高崎翔子は酷く怯えた様子で部屋に引き籠っていた。何を言っても誰も相手してくれない。

‘見えないモノ’が見えるという真実でも世間からはオカシイ人に思われる。

親でさえ、私をオカシイと言い精神病院に連れて行ったりしてくれたが治らないので

親も頭を抱えていた。でも、私には聞こえるのだあの笑い声が。

笑い声のせいで翔子は寝れなかった。医者から処方して貰った眠剤で眠っていたのだが、その日は眠剤が切れていて寝る事が出来なかったのだ。

いや、切れてはいない。眠剤は欠かさず貰っているはずだった。何故、無くなったのか？

‘どこかに消えた’それしか思い浮かばなかった。そんな異変を感じるようになってから

翔子は毎日、怖くて仕方が無かった。そして、この笑い声である。

その笑い声はだんだん翔子の方へ近づいてきた。翔子は無我夢中で携帯にメッセージを打った。

それが翔子の最後のメールであった。その内容はこう書かれていた

<美佳子助けて>

### 第一章 「すべての始まり」

「編集長今度の企画の事なのですが・・・」

「ああ～あの企画ね、あれはダメだな」

またボツか・・・これで何回連続ボツになったのだろう・・・この職場に来てもう3年がたとうとしている。時にはこの仕事は私に合っていないのだろうかと考える事もある

「じゃ、次考えてきてね」

そう厳しく私に言うのは川本編集長。川本編集長は業界でも有名でこの人の所に企画を持っていて通った企画はかならず成功している。というくらい凄い編集長なのだ。

そんな彼の下で私は働いている。私がこの出版社に入ったのはこの川本編集長がいたからだろう。ある日、私が読んでいた雑誌で川本編集長の書いた記事を読んだ時に私の体に電気が走ったかのようにビリビリときたのだ。それ以降、あんな記事を書いてみたいと思った。もともと、学生の頃から字を書くことが好きだった私は川本編集長のいる出版社に入ることにした。噂以上に厳しい川本編集長だが、私はそれが編集長の信念なんだと思っている。それが無ければあれだけの記事が書けるわけが無い。

「田中さん、もうちょっと読者の事を考えて書いてる？」

「はい、勿論です！読者が一番ですから」

「ちょっと違うんだよね。読者が興味ある記事は勿論必要なんだが、こちらの思いをぶつける事が必要なんだ」

それが難しい・・・美佳子は頭の中では理解していたが文字で書けなく苦しんでいた。

<ぶつける思いか・・・>

頭を悩ませている時に、翔子からメールがきた。ここ数日、様子が変わったので心配していた。

翔子とは学生の頃からの友達で昔は元気で活発な子で卒業後は元気な所を生かして

アパレル関係に行ったのだが急に会社を辞めてしまって、いつも何かに怯えている様子だった。最近ではメールも中々くれなかったので心配していたので美佳子はホッした。メールを見てみると思わず声を出してしまった。

「えっ!？」

<美佳子助けて>

それだけが書かれていた。編集長に許可を貰って私は会社から翔子の家へ真っ直ぐ向かった。翔子の家に着くと何やら騒がしい。家の前にはパトカーやら救急車が止まっていた。

私は嫌な予感しかしなかった。家の前で翔子のお母さんが泣いていた。私が行くと翔子のお母さんが私の姿をこっちに走ってきた。

「美佳子ちゃん!翔子が・・翔子が」

「どうしたの?落ち着いて」

翔子のお母さんはその場で泣き崩れてしまった。フツと救急車の方を見ると丁度、運んでいる所だった。

「すみません!待ってください!」

私は救急車の方へ走って行き

「すみません、友達なんです」

「いや、見ない方が良い」

「親友なんです!」

「しかし・・・」

「お願いします!」

隊員の方は渋々、布を捲ってくれた。中には確かに翔子だが、それはもはや翔子では無かった。どうすればこの様になるのだろうか。

顔は血だらけになり、足や手は変な方向へと曲がっていた。

私は翔子の死体を見てすぐ吐いてしまった。あれが翔子・・?信じたくなかった。

何故・・という言葉がずっと脳裏をグルグルと回っていた。

この事件をきっかけにすべての始まりだった。